HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Studies on Being in Aristotle's Metaphysics Beta [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	Karuzis, Joseph
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第11057号
Issue Date	2013-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/53781
Rights(URL)	http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Joseph_Karuzis_abstract.pdf (「論文内容の要旨」)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称　博士（文学）　氏名　Joseph Karuzis

学位論文題名

Studies on Being in Aristotle’s *Metaphysics* Beta

（アリストテレス『形而上学』B 巻における存在の研究）

Karuzis 氏はアリストテレスの『形而上学』における存在探求の方法として the aporetic method を提案する。不明瞭な問いはたとえ解に出合ったとしてもまさにそれがその問いの解であることを知りえないことから、氏は「美しくアポリア（難問）を提示すること」にこそ思考の展開が望めるとして、アポリアの明晰な提示を探求の基礎にそえる。アリストテレスは『形而上学』B 巻において存在の問いとして十五のアポリアを提示するが、氏はそのうち第一哲学の基礎的な問いとして最初の五問の明晰な提示と解明に取り組む。本論文の目的であるこれらのアポリアの解決に向けて『形而上学』全体そして『自然学』等にも考察を広げる。『形而上学』をめぐる伝統的な the historic-genetic interpretation（発展史的解釈）と the systematic-unitary interpretation（統一的解釈）の論争のなかで、氏は統一的解釈の有利を論じ、その見解に与し、それを実践する。氏はテクストを相互に参照するとき、整合的で統一的な読解が可能であるとする。本論文において氏が中心的に取り上げる問いは「存在論-神学アポリア」と呼ばれるものであり、第一哲学は存在を存在として普遍的に考察する学であるのか、それとも存在の根拠としての神を考察する学であるかをめぐり論争がある。

第一部序論において、氏は the aporetic method が存在としての存在の学に至る「道筋」(p.1,192)を備えるとし、『形而上学』第二（B）巻のアポリアを一つずつ取り上げる。その解決は『形而上学』と関連文献を「一つの全体」(p.1,192)として考察することにより適切になされるとする。論述全体が基本的なアポリアに立ち向かう一つの方法論的な統一性をそなえている。第二部二―五章において、各々のアポリアに取り組む。第一アポリア「あらゆる種類の根拠を探求することは一つの学に属すかそれとも複数の学に属すか」、第二アポリア「実体の原理を考察する学と論証の諸原理を考察することは一つの学に属すかそれとも複数の学に属すか」、さらに第三アポリア「あらゆる実体とその属性を探求することは一つの学に属すか複数の学に属すか」はそれぞれ関連する問いである。

これらの解決を主に『形而上学』四巻の存在の帰一構造の論述さらには六巻の理論学の分節の議論に求める。個別論証科学とは一つの類のもとに、その自体的構成物を知る営みである。例えば、幾何学は類の原理として「大きさ」のあるこ

とを容認し、そのもとに二次元や三次元の存在者をその自体的属性として考察する。従って、この枠のもとでは、端的な存在者としての実体も個別科学を形成する類の属性として処理されることになる。ここにアポリアが生じる。この個別論証科学とは別に存在を存在として考察する学の可能性が問われる。氏はこの存在の学を普遍存在論とその「枠」(p.27)のもとに存在者の存在の第一の根拠としての神を考察する神学という二段階からなる存在の学即ち「第一哲学」の「二段階説」(p.37)を提示する。「第一段階は存在の一般的分析を介して帰一構造を確立する普遍存在論とロギコス（形式言論術的）アプローチに関わる」。第二段階において「その「一」が神により満たされる」神学となる。神がその一者でありまた他のあらゆる存在者がそれにより秩序づけられるものである」(p.38)。

氏によれば普遍存在論は「いかに存在は語られるべきか？」という視点のもとに「ロギコス」と呼ばれる方法により遂行される。その問いへの一般的な応答として存在者の類としての範疇分類が導出される。それにより実体と属性の存在論的身分差が確立され実体による他の存在者の秩序づけとしての「帰一構造」を提示する。例えば、医学は「健康」という第一原理のもとに、健康を生みだすものとしての治療や、健康の徴としての体温等健康に関わるあらゆるものが秩序づけられ一つの学を形成する。同様に、「存在」は端的な存在としての「実体」を原理とし、それとの帰一的な関連のもとにあらゆる存在者を普遍的に秩序づける。「第一哲学の神学と存在を存在として考察する学の二重の特徴は実体の帰一構造により結合される」(p.36)。普遍存在論が提示するこの存在の帰一構造の枠のなかで、氏は神学が第一の存在の根拠として神を探求し、そのもとにあらゆる存在者が秩序づけられ、第一哲学が成立することを論証している。これは「存在論—神学アポリア」への一つの応答である。

第三章で、氏は第二アポリアへの応答として、四巻に基づき論理と存在の究極的な原理である矛盾律をロギコースに探求している。無矛盾の原理（矛盾律 PNC）は普遍存在論の最も確実な基礎である。「論証科学の公理は最も普遍的であり、個別科学だけではなくあらゆるものの第一原理である」が故に、氏は第一の哲学がそれを探求すると主張する(p.40,170)。氏は最初にアリストテレスの四つの PNC の表記を提示し、それぞれから PNC の理解を試みそしてそれらを秩序づける。続いて、PNC 否定論者を(A)(B)二つのグループに分け反論する(pp.59-75)。(A)にはプロタゴラス等が属し、彼らは事態の困難さ故に自ら知らずに意図せずに矛盾律を否定するため、説得が必要とされる。(B)は真理というよりは議論それ自身のため矛盾律の論証を求めるために、議論により強制されることにより論駁される。PNC があらゆるロギコスな議論の基礎である。

第四章において氏は第三アポリアにとりくみ実体と属性の探求が一つの学で遂行されるかを考察する。氏は実体の探求を通じてあらゆる存在の第一原理と根拠

を見出すにいたると論じる。第五章においても存在一切の探求が実体の理解に基づき展開すると論じられる。

こうして第一哲学の存在が確立されたとして、氏は第三部第六章において、可感覚的事物以外の存在者があるかという「形而上学の最も基礎的な問い」(p.177)に向かう。氏はこれを「十五のアポリアのなかで最も重要なそれ」(p.88)と位置付ける。その候補としてプラトンのイデアが吟味され、それが抱える離存性や第三の人間論等のアポリア、内的欠陥によりそれが存在したとしても生成物の根拠たりえないことを、『形而上学』第一巻の二十の批判を吟味することを通じて明らかにする。イデア論を乗り越え代わるものとして形相は質料からロゴス上区別されるが分離されない質料形相論が提示される。「質料形相論による説明はプラトンのイデア論を単にありそうもなく非現実的なものにするだけではなく、可感覚的世界にとって無関連であり適用できないものとする」(p.146)。他方、氏はアリストテレス『形而上学』第十二巻により不動の動者の存在証明を展開する。これは神であり純粋な現実態であるとされる。これにより存在を存在として考究する第一哲学は帰一構造を確立すると結論される。

第四部第七章「結論」においてこれまでの議論を整理する。まず、存在としての存在の学としての第一哲学が建てられる土台としてアポリア巻があることを確認する。存在の第一原理である矛盾律によりあらゆる議論が根源的に吟味される。この普遍存在論故にあらゆる存在の根拠は「一つの学」により考察されることを確認するが、氏はそれを神学の「枠組み」を構成するものであるとして、二段階説により裏付けている。氏は「神学がその主題の普遍性そして学それ自身を十全に包含する本性故に根拠のあらゆる種類を探求する適切な学である」(p.170)と結論する。